

第 12 回 パシフィック・アイランダーズ・クラブ懇談会

講演録

(2013 年 5 月 21 日 於：明治大学紫紺館)

2013 年 6 月 24 日

太平洋諸島センター (PIC)

【司会 (黒崎 PIC 次長)】

ただいまから、第 12 回 Pacific Islanders Club (パシフィック・アイランダーズ・クラブ) 懇談会を始めさせていただきます。本日は、お越しいただきまして、誠にありがとうございました。

今回は、本年度最初の Pacific Islanders Club 懇談会で、12 回目を迎えることができました。今回は過去最高の 150 名を越える方々にお越し頂きました。

これまでの懇談会は、どちらかという地域別やテーマ別に、その方面の専門家の皆さまから話を拝聴するというかたちで行ってきました。今回からは、日本と太平洋の人と人との交流を支えてきていただいた皆さまからお話を伺うかたちで進めていきたいと思えます。

第 1 回目として、今回はパプアニューギニアのウェワクから川畑さんをお迎えして、お話を聴かせていただくこととしました。川畑さんにつきましては、この後小林先生から少しお話ししていただきますが、多分、皆さまのほうがよくご存知だと思いますので、ここでの詳しいは省略させていただきます。ただ、今回このように 150 名来ていただきましたが、他方で、今回御予定があり出席できない皆さまから、「この映像をどうにかして観せてほしい、ほかに同じような機会がないのか」と、いろいろと連絡をいただいていた。今後頂いた御要望につきましては様々な形で皆さまのニーズに応えしていきたいと思えますが、こうした多方面からの要望を伺うにつけ、本日この場でお話を伺えるということは、非常に貴重な機会だと思っております。またお話を聴いていただいた後には、1 時間程度ですが懇談の場も設けておりますので、是非お楽しみいただければと思っております。なお、後ほどになりますが、ガブリエル・デュサバ駐日パプアニューギニア特命全権大使にも御臨席を賜ることになっております。

それでは、まず小林先生より最近の太平洋と日本の関係について、お話を伺いたと思います。小林先生、よろしくお願ひ致します。

第 1 部 最近の太平洋と日本の関係

～安倍総理の太平洋諸国への訪問実現を！～

【小林泉・大阪学院大学教授】

ご紹介いただきました小林です。今回これだけお集まりいただいて、パプアニューギニアの快男児または冒険親父の川畑さんのお話を聞きできることを、私自身も大変楽しみにしているので、私からは10分程度の話にさせていただきますと思います。

前回の11回目は2月でした。2月から本日まで、日本人にとって、それほど大きな太平洋の変化を示すようなニュースはなかったように思います。日本と少し関係のあることとお話しさせていただくとすれば、2月にパラオのトーマス・レメンゲサウ大統領が来日し、3月には、パプアニューギニアのオニール首相が来られました。

今年は、各国首脳が何人か来られることが予想されますし、秋には「太平洋島・サミット」閣僚中間会合がございます。そういう意味でも、今年は日本と太平洋の大変重要な1年になると思います。そのことと関連しまして、今日は、私の思いを少しお話しさせていただきますと思います。

昨年末に新しい政権ができて、年が明けてから、安倍総理が東南アジア、アメリカ、ロシア、モンゴル、中東と精力的な外遊活動を行っております。すごいですよね、この数カ月足らずの機関で。もしこの感じで行きますと、近々大洋州にも行ってもらえるのではないかと期待を持っておりますし、ぜひ行ってもらわなければ困ると、私自身は思っております。

いつも言っておりますが、日本の総理で大洋州の国に行ったのは、1985年の中曽根総理だけです。このときの外務大臣が安倍晋太郎さんで、その秘書で息子の安倍晋三さんが、フィジー、パプアニューギニアに行っておられます。3月に開催されたオニール首相との首脳会談でも、安倍総理はそう言っております。

もう少し調べてみたら、1980年に、大平正芳さんが現職総理として初めて太平洋島嶼国を訪問しています。1980年というと、大平さんが環太平洋構想を打ち上げた年です。これを広めるために、豪州、ニュージーランドに行っているのですが、その帰りに、2時間だけですが、パプアニューギニアにストップして、空港近くの迎賓館で、当時の首相、マイケル・ソマレと会談しています。1980年から今まで、わずかその2人だけです。

今日は外務省にご関係の方も多いと思いますし、政界にもいろいろ通じている方もおられると思います。私としては、ぜひ安倍総理に早い時期に行ってもらうことを、みんなで盛り上げて、周りからワイワイ騒いで、ぜひ実現するようにしていただきたいと思っています。

実は、太平洋の中で、PIF（太平洋諸島フォーラム）が毎年会議をやっています。そのとき、全部の首相が一応集まるわけですが、最近はサブリージョナルな動きが出てきて、メラ



ネシア・スピアヘッド・グループが相当あり、それがまたパプアニューギニアを中心にして、メラネシア諸国が集まって会議をしています。

もう一つ、ミクロネシア連邦、パラオ、マーシャル諸島によるミクロネシア首脳会議があります。これも、基本的には元日本の統治領だったミクロネシア3国の大統領が、毎年集まっています。今年は12回目で、日にちはまだ決まっていますが、3人の大統領が7月ごろに、今年はパラオに集まって会議をします。

そういうタイミングで安倍総理も行ければ大変良いと思います。7月は参議院選挙ですから、できるかどうか分かりませんが、ぜひ皆さんも、一緒にこういう声を大きく挙げて、実現するようにお力を出していただきたいと思います。

こういう話を、先ほど川畑さんとお話ししていたら、「パプアニューギニアやソロモンやほかの所でも、戦争で日本兵もたくさん死なれました。そういう所に、日本のそれなりの人たちは誰も行ってない。ぜひ行かなければいけない。パプアニューギニアにも、それなりの人物が日本から来てくれるように、後で言うぞ」と、言っておられました。ぜひそういうこともアピールしていただいて、今日はそういう話で盛り上がり、終わったら、政府なり政治家に、そういう話を通じて圧力をかけられるような団体に、このパシフィック・アイランダーズ・クラブが是非なっていければと思います。

ということで、あまり長くないうちに川畑さんにバトンタッチしたいと思います。今日は失礼致しました。ありがとうございました。

本日は小川所長が川畑さんに質問をする形式で会を進めるということになっています。それでは、よろしく願い致します。

第2部 川畑静さんに聞く「ウェワクの暮らし、人、そして交流」

【小川和美 (PIC 所長)】:以下「小川」

小林先生ありがとうございました。高い所から失礼致します。所長の小川です。今日は、ウェワクから川畑さんをお招きしています。どうぞ、よろしく願い致します。(拍手)

【川畑静 (ニューウェワクホテル)】:
以下「川畑」

どうも。パプアニューギニアでホテルをなんとか経営致しましております川畑静でございます。私にしゃべらせたら何を言い出すか分からないので、一問一答式



でお話をしましょうということで参りました。よろしくお願い致します。(拍手)

初めてのパプアニューギニア：未接触民族と出会い（1971年）

小川：

川畑さんの経歴については、お手元の資料にまとめてありますのでご参照下さい。パプアニューギニア（PNG）に行かれる前の58年間の波瀾万丈の人生についてもたいへん興味があるのですが、今日は時間も限られていますので、PNGでの話を中心にお伺いしようと思っています。さて、川畑さんが最初にPNGに行かれたのは、ムービーカメラマンの時代のことですよ？



川畑：

はい、そうです。1971年にパプアニューギニアに、まだ文明に接していない、いわゆる「未接触民族」と言われる人がまだいるということで、東京農大の探検部の学生4人を連れてそこに入りました。

小川：

お手元の資料で当時の貴重な写真もご覧いただけます。1971年に川畑さんがセピック川の支流エイプリル川を遡って現地の人たちと遭遇したときのものです。

川畑：

はい。出発してから3カ月後にやっとこの人たちと会えまして、それから1カ月間一緒に生活して帰ってきました。

小川：

向こうの人たちの反応はいかがでしたか？

川畑：

カヌーで川を遡り、これ以上行けないという上流まで来たところで、片腕のないおじいさんが、ガタガタ震えながら飛び出してきました。その頃の僕は、彼ら以上に野蛮人になっていましたから、「敵ではないんだ」という意思表示のために、その老人をガッと抱き込んで、30分くらいそうしていたら、彼の震えも止まりました。そしておじいさんは、木を

ボンボンたたき出しました。すると向こう側から、「ヒーヒー」と言いながら仲間の連中がバーッとやってきて、私を取り囲みました。この写真の風体の連中です。

で、そいつらに、おじいさんが一生懸命説明するわけです。私が思うに、「この人は、私たちが殺しに来たのではない」というようなことを言っていたのだと思います。印象的だったのは発声の仕方、吐く息と吸う息を使って「ヒーホーハー……」てな感じで話をしていました。私が聞いても全く分からないですが、そのうちこっちまで「ヒーホーハー……」と（笑）。日本に帰ってからもしばらくその癖が残りました。

そんなことを2時間ぐらいやって、最後にひとりが地面を指さしました。「ここにおれ」という意味だったんですが、こっちはもうここで殺されても仕方ないと思いながらいたら、連中が掘立て小屋を造ってくれました。それで連中に受け入れられたとわかったのですが、それでもそのあと3日間ぐらい、夜になると忍び足で私たちの寝ている所を見回りに来ていました。たぶんむこうは、我々が夜中に連中を襲撃するんじゃないかと警戒していたんじゃないかと思います。

小川：

友好的でありながら、怖がられていると。

川畑：

じつは出発前に、ウェワクの町にいたオーストラリア人の司令官がふたつアドバイスをくれまして、それは「鉄砲を持っていけ」ということと、「連中と一緒に飯を食え」ということでした。それを思い出して、川の向かい側でヒクイドリを一羽撃って持ち帰り、それを蒸し焼きにして連中とみんなで食べたら、翌日からこの「夜回り」がバタッと止まりました。

そうして1カ月間、そこで生活しました。ところがある日、体調の悪いヤツがいて、僕らが入ったために風邪でも引いたのかと薬をやろうとしたら、「バーン」とたたかれました。毒薬でも飲まされるのではないかと心配したんだと思います。そしてそれをきっかけに、みんなその場から散ってどこかに行ってしまいました。たぶんちょうどこのとき、彼らは狩猟民族から農耕民族に切り替わろうとしている時だったんやな



いかと思います。せつかく農耕に踏み切ったところを、我々のせいでまた元の世界に帰っていきました。悪いことをしたなあと思いました。文明人が入って、いけないことをするとそういうことになるのではないかと。本当に残念で仕方ありませんでした。

小川：

そしてその後またニューギニアに戻られたのが、14年後……。

川畑：

いや、1973年です。

ブーゲンビルとパングナ銅山

小川：

え？ 1973年にもういちど行かれていたんですか。それは何を？

川畑：

2回目はブーゲンビルに行きました。ブーゲンビルでは鹿児島県民の8,000人の将兵が亡くなっているの、そういうことを取材しなければいけないと思って行ったわけです。

小川：

1973年でしたら、まだブーゲンビルのパングナ銅山が開業する前、アラワの町もできる前のことですね？

川畑：

そうです。あの銅山が開業する前です。あの銅山のおかげで(島はしばらく経済開発が進みましたが=事務局補足)、結局ブーゲンビルは内戦になりました。政府から銅の見返りが地元によくないので反発が起こり、紛争になって、結局銅山はめちゃくちゃになりました。

小川：

ブーゲンビルの銅山を再建して、なんとかもう一回再開をという話をずっとやっていますが、なかなか進まないですね。

川畑：

あれは進まないです。紛争後、政府は自治政府を認めましたが、あの銅山は放置したままです。現在再開しようとしても、世界のどこの企業家も、あれには金がかかりすぎるといふことです。

ウェワクへ(1984年～)

小川：

さて、1973年のブーゲンビル行きは、戦争で亡くなった方のことを思っただけの取材だったとのことでしたが、「慰霊」ということがそれから10年の後にパプアニューギニアに居を構える一つのきっかけになったのですね。

川畑：

そういうことです。

小川：

1984年。数えてみたら、川畑さんが58歳のときです。それまではジャーナリストとしてあちこちを撮影されていた川畑さんが、なぜまたウェワクに行くことになったのですか？



川畑：

その当時ウェワクに、パプアニューギニアで生き残った日本人たちが、英国人から買い取ったホテルがありました。ところがマネージメントにいろいろ問題があって、その当方で5,000万円の借金ができました。で、酔っ払いもたむろするし行くヤツがおらん、どうするかとなったときに、僕がニューギニアに出たり入ったりしていたので、僕に1カ月か2カ月面倒をみてくれとなりました。僕はジャングルと海が一番好きな世界なので、「よし、1カ月か2カ月くらいならもつだろう」と、入ったのが運の尽きでした。

小川：

川畑さんが最初に行かれたときには、「ウェワクホテル」というホテルがあり、お客さんが来るけれども、経営がうまくいっていない。それで縁あって畑違いの仕事なのに手を染めたのが「運の尽き」・・・というか出会いの始まりで、そのままウェワクに居を構えることになったわけですね。

川畑：

そういうことです。薩摩がくれた「チェスト」の精神、ここでホテルをつぶすわけにはいかんという心です。そして無我夢中でホテルの仕事をするうちに、4年たったころぐら

いだったか、銀行や弁護士などの応援団がどんどん出ました。そして、銀行利息の延滞金の交渉をしたりしながら、こつこつ 20 年間かけて借金を返し続けました。

小川：

20 年間かけて 5,000 万円の借金を返した、と。

川畑：

完済しました。それまで商売なんて考えたこともなかった男ですから、まあよくもったもんだと自分でも不思議に思うくらいです。でもそれから改装に改装を重ねて、今は立派なホテルに作り替えました。そういうことです。

小川：

さきほど「薩摩がくれた」とおっしゃいましたが、長崎生まれとご紹介しているのですが、ご両親が鹿児島のご出身なのですね？

川畑：

鹿児島です。

小川：

そこが川畑さんの原点にもなるわけですね。

川畑：

原点です、そうです。

川畑式ホテルマネージメント

小川：

パプアニューギニアに行かれて、ウェワクに行って、そのように荒れ放題になっていたホテルに最初に乗り込まれたときに、向こうのニューギニアの従業員の人たち、あるいは酔っ払いの人の反応というのは、どのような感じだったのですか？

川畑：

まず料理です。こんなまずい物を食わしていたのかということで、幸い私は勘当されたときに仕出屋にいたことがありましたので、4 年間、徹底的に日本人に合うような味付けを仕込みました。

ところが従業員は「こうしなさい」と説明しても、翌日になるともう忘れてしまってい

ます。たとえば味噌ですが、もうどんどんなくなる。自分たちは飲まないものだから、教えても量や味加減がわからず、それこそものすごく辛い味噌汁を平気で出すのです。何もかも基礎ができていないので、これは仕方がない。そんなわけで、1ヶ月ぐらいかけて1を覚えさせるというような、従業員を育てるためには本当に忍耐力が必要でした。

小川：

何度教えてもわからない、それを何度も繰り返す中で、向こう側も、「こんなの、やっつけられねえよ」という感じになることはないのですか？

川畑：

結局、俺の「チェスト」の精神が。おだて、叩きながら。でも2を教えたら、今度は1を忘れてしまうのです（笑）。ま、今でもまだまだです。私の三女が、今は全てのマネージメントをやっています。娘がキッチンで監督しながら、味見をして、日本人用の味付けをして出すようにやっています。今は本当におかげさまで、ウェワクホテルは満室状態が随分続いております。で、その売り上げはホテルをもっとリニューアルするために使っています。得たお金はまた地元に戻すことが私の生き方です。私は、バーの売り上げでこちらに行ったり来たりしています。そこはきれいに分けました。

小川：

ニューウェワクホテルの売り上げには、ホテルの売り上げとバーの売り上げがあるわけですね。バーのほうは、先ほどご紹介いただいたように、酔っ払いがたくさんたむろして、最初に行ったときはすごく大変だったと思いますが、酔っ払いからからまれるようなことはなかったのですか？

川畑：

それはもう！

亡くなられた前の野村大使から、「川畑さん、けんかに勝負秘訣を教えてくれ」と訊かれたこともあります。あの国はペイバック、「やられたらやり返せ」「やり返していい」という国ですから、まず相手に一発殴らせてからやるのです。僕は、海軍柔道で二段を持っていて、殺しの柔道もやりま



したし、空手も少しやりました。あと左利きなので、相手にとっては勝手が違うということもあります。そんなわけで、まあ4～5人相手にしても平気です。今は1人相手にできるかどうか分かりません（笑）。

小川：

つまり、何度か乱闘騒ぎみたいなことも起きながら、それをねじ伏せて、向こうに、「川畑、ちょっと手ごわいぞ」と思わせることもあったわけですね。

川畑：

セキュリティーがお手上げになったら、僕が引っ張り出されるのです。おとし、ちょうど日本人が来ておられるところで、酔っ払いが暴れたんで、私は逆手を握り、ホテルの入り口のほうに連れていきました。相手は力づくで手を振り払おうとするんで、その力を利用してポツと放して蹴り上げて。そうしたら、それまでおっかなびっくり見ていた連中が、よってたかってボカボカ叩いて（笑）。

小川：

おとし……84歳ですか！？

そのようなことをやられるとは、向こうも思っていなかった……。

川畑：

それを見てから「やばい、やばい」となったのでしょうか。「下手したら殺される」ということで、今はたちの悪い酔っ払いがほとんどいません。

小川：

従業員との関係はいかがですか？ 従業員から何か、「給料安いから、ちょっとくすねてやろう」などということは出てこないですか？

川畑：

出てこない。

小川：

ないですか。

川畑：

「給料が少ない」と辞めていくやつがいるけど、よそに行ったらもっと安いわけ。また帰ってくるけど、そういう人間は駄目、雇いません。

小川：

そういうところを含め、ウェワクに行ったときからの一つのスタイルとして、「川畑はこういうヤツだから」という感じの認知をさせてしまったところが、向こうの中でのポジションをつくることになったのでしょうか。

川畑：

はい。それから、こういう言い方はおかしいかもしれませんが、女房を持って、子どもができたことによって、「あいつはここで討ち死にするのだ」と、みんなが認めてくれました。それで僕は、30年あそこで危害なしに生きてきたということです。

小川：

今日も奥様と一緒にいらっしゃっていますが、地元で受け入れられたもうひとつの要因として、やはり向こうで骨を埋める覚悟があり、それがわかってもらえたということがあるんですね。

川畑：

そうです。

パプアニューギニアは危険？

小川：

パプアニューギニアは土地問題がややこしい、それから契約してもあとから「お金をもっとよこせ」などということがよく起きがちなので、なかなか日本人が出て行きにくいという話を聞くのですが。

川畑：

パプアニューギニアでサゴヤシの研究をされている東京農大の豊原先生がおっしゃっていますが、とにかくまず土地を取得するときに徹底的に話し合うことが必要だと。ちゃんと調べずに「俺の土地だ」という言葉を鵜呑みにして契約すると、ビルを建て始めたらあとから150人ぐらい地主が出てくるという所ですから。

小川：

川畑さんは、ホテルを経営しながらそういう経験はありましたか？

川畑：

ありません。あそこは政府の土地で、国と 99 年間のリース契約を結んでいるんです。

小川：

それで 29 年、土地問題が起きることなく過ぎたわけですね。

川畑：

そういうことです。

小川：

パプアニューギニアというと、土地問題のほかにも治安面で不安がいろいろあるということをよく聞くわけですね。ウェワクも、やはり町の中は、少しそういう危ない所もありますか？

川畑：

当然です。しかし、世界に平和はどこにありますか？ 日本でも、親が子どもをひねりつぶす。子が親を殺す。どこも一緒です。何もパプアニューギニアだけが殺しがあるわけではありません。600 万人という人口で計算するからいかにも多いように思うけども、アメリカに行っても、どこに行っても同じことは起きています。

パプアニューギニアは危ない所だなどとよく言われますが、「ばかなことを言うな」と、僕はいつも言っています。僕は生きています。きちんと 30 年間。金持ちの格好をしているから駄目なのです。僕のように半ズボンをはいて、Tシャツか何かを着て、草履を履いて、そういうスタイルでいいのです。そういうことです。

パプアニューギニアの現状、そして魅力

小川：

そうして 30 年近くがたちました。今、パプアニューギニアは経済がたいへん好調ですが、現地でお感じになることはありますか？

川畑：

今のパプアニューギニアは、僕が最初に出会ったエイプリル川の連中、彼らに背広を着せたという、そういう段階です。さっきお話ししたとおり、悲しいかな、パプアニューギニアは日本のような基礎が全然できていません。日本の場合は、江戸時代まで段階的に発展していった基礎があって、その上で明治維新から一気に立ち上がったわけですが、ニューギニアは、石器時代からいきなり飛行機やコンピューターなどが入り、その途中の段階が全くありませんでした。

基礎が何もないものですから、国会議員さんも本当に昔ながらの感覚の中でただ背広を着ている状態。そして金はどんどん入ってくるのですが、自分のワントーク（仲間）の人たちが来ると、小切手をパッパッと切ってどんどん渡します。やはり、2000年は見てあげないといけないと、僕は思っています。（笑）

小川：

2000年というのは、また結構長いスパンで……。

ところで、パプアニューギニアには、昔は、木材会社や水産会社もたくさん来ていたんですが、その多くが撤退してしまいました。昨今また LNG などの資源ブームの中で日本でも再び関心が高まっている感じはありますが、29年間ニューギニアにお住まいになって、やはり「波」をお感じになられますか？

川畑：

当然そうです。最近では橋の設計をする長大さんが事務所を開いて大きい橋や道路の仕事で活躍しています。最近 ODA もパプアニューギニアに顔を向け出したような感じですね。

小川：

今日来られている皆さまの中には、パプアニューギニアに行かれたことがある方もいれば、まだ行ったこともない方もいらっしゃると思います。川畑さんから見たパプアニューギニアの魅力というのは、どのへんにあると思いますか？

川畑：

それはもう、あの大自然。パプアニューギニアの自然は、ハワイなど目ではないですよ。パプアニューギニアには、いろいろ点で可能性がたくさんあります。魚もうまいですよ。僕は、アマゾンからなにかから、世界中あちこち魚を食べたけど、パプアニューギニアの魚はものすごくうまいです。

小川：

川畑さんのホテルに行ったときも、おいしいお魚をいただいた思い出があります。

川畑：

パプアニューギニアは観光立国としても十分成り立つ国なのです。ところが、現地の人々が観光の意味を理解できていない。まだフィッティングしていないわけです。地元の人たちが観光の意味を理解して、ビジネスとしての観光業が育つ……これにまた何千年（笑）。

小川：

まだまだ道のりは長いということですね。

川畑：

でも可能性はたくさんあります。僕はそう思います。

新しい交流事業立ち上げへ

小川：

さて、今日お配りした資料にもちらっと書きましたが、川畑さんは今年また新たなニューギニアとの交流事業を計画中ということで、今回もそのために来日なされたとお聞きしています。具体的にどういうことをお考えなのですか？

川畑：

去年から計画していたんですが、向こうの伝統的な芸能踊り連を連れてきて、交流事業をやろうと思っています。まずは11月2日、3日の鹿児島のおはら祭りにニューギニアの踊り連を連れて行きます。すでに鹿児島市や地元のマスコミなどにも協力をお願いして「よっしゃ、やりましょう」と話が進んでいます。

小川：

鹿児島との交流をやろうとしていらっしゃる……

川畑：

鹿児島だけというわけではありません。まずは「チェスト」を僕に入れてくれた鹿児島と話を進めています。そこから北へ向かってあちこちでできればと思っています。鹿児島は、じつは1975年に独立したあと、Air Niugini（ニューギニア航空）が一番初めに入ったところなのです。そのとき僕は取材で鹿児島に行き、初代大使のノンブリさんの出迎えをしました。

小川：

ニューギニア航空は最初は鹿児島に飛んでいたのですか。

川畑：

はい。そのあとは福岡でしたが、九州にいましたんで僕らはそのときに皆で一生懸命応援しました。で、その後、関空、そして、今は成田に週1便入っています。

小川：

鹿児島とパプアニューギニアとはそういう縁もあったんですね。ところで、この事業を始めようと思われたのはどうしてなのですか？

川畑：

パプアニューギニアで亡くなられた 13 万人の将兵への鎮魂と慰霊法要、それから日パ友好促進、このふたつ。あくまで目的は交流で、興行ではありませんから利益は追求しません。ただ費用はかかりますから、基金をつくって皆さんのお力で少しずつお金を集めていただければ、と。また賛同してくださるなら、お金が出せなくてもいろいろご協力いただければありがたいと思っています。青年海外協力隊がかつてパプアニューギニアに来ていた人たちも協力してくれると言っています。ありがたいことです。

「ちりも積もれば山となる」という言葉もあります。私がやるのではなく、そういう力を集めることにより、各界層の大勢の皆さんのお力で、これを半永久的な行事に持っていければと、私は考えているわけです。そして来年は、パプアニューギニアの独立記念日に「おはら連」が行って、踊りと慰霊法要をやって、本格的な交流をスタートさせようと計画しているわけです。

小川：

日本に来るだけではなく、相互に訪問し合う計画なのですね。

川畑：

交流を進めて行けば人の往来も増えるでしょう。伝統的な彫刻などニューギニアの産物も、日本で売れば地元の貴重な収入源となって子供たちを学校に行かせたり病院に行かせたりもできる。交流の輪が広がって「こういうデザインなら日本で売れますよ」という人が出れば、それを向こうで作らせます。今回もサンプルをたくさん持ってきました。そういう物流の交流をしていけば、パプアニューギニアの人も、またそれだけ収入が増えてくるので、少しは豊かになるのではないかと思います。

小川：

まずはおはら祭りの会場で売るということですね。

川畑：

そういうことです。今回は大きなテーブルを踊りの会場につくって、「いくらか結構です」と、値段は付けないかたちにしてもらおうというアイデアもあります。

小川：

おもしろそうですね。

川畑：

僕は、表に出るのは非常に嫌な男なのですが、今回はこの交流事業の成功のために目をつぶって頑張らないといけないと思っているわけです。新聞社の方からインタビューのお話しが来たんですが、今回だけは OK しました。僕はもともと撮るほうであり、撮られるのは嫌なのです (笑)。自分が追いかけるのは嫌なのです (笑)。

小川：

私も、今回ウェワクに電話をかけて、「パシフィック・アイランダーズ・クラブでお話しして下さいますか？」とお願いしたときに、一瞬逡巡されかけながら「いいですよ」とおっしゃってくださったのが印象に残っています。

川畑：

パプアニューギニアに対して、また鹿児島に対しての「お返し」ということ、それと、僕が「回天」の生き残りということもあります。(回天のベースになった)「九三式魚雷」というのは扱いが難しく、水雷科の兵隊が 10 年かかってやっと分かるというような魚雷でした。僕は小学校の頃から理数が弱くて頭が悪かったものですから、いくら言われてもなかなか頭に入らない。それで出撃が後回し、後回しで、結局生き残ってしまいました。

事務局注：**回天** (かいてん) は、太平洋戦争中に海軍が考案した魚雷による特攻兵器。「人間魚雷」ともいう。実際に出撃戦死した者は 87 名 (うち発進戦死 49 名)、訓練中に殉職した者は 15 名、終戦により自決した者は 2 名。回天による戦没者は、特攻隊員の他にも整備員などの関係者もあり、それらを含めると 145 人になった。訓練中の死者は特攻兵器の中で最も多い。(ウィキペディア記述要約)

小川：

出撃の 6 日前に終戦を迎えたと伺っています。

川畑：

それに対して、死んだほうが良かったのか、ずいぶん考えました。素晴らしい優秀な人たちが次々に出撃して全部死んでいく。そしてまた訓練中に島の下に突っ込んだりして、仲間がぼこぼこ死んでいきました。僕みたいな人間が生き残ってしまったことについて、もうずっと申し訳ないという負い目が死んだ仲間たちにあったんですが、先年心筋梗塞を起こして、もう自分も長くないと感じたことで、意を決して靖国に行って、終戦から 65 年たってはじめて仲間たちに「すまなかったな」と皆に謝りました。それでやっと胸がスッ

となったのですが、そういうことも、今回「やろう！」と思ったひとつのきっかけになりました。

小川：

「回天」に乗りそこなってしまうか、出撃しそこなってしまうか、それをずっと心の中でいろいろ考えながら生きてこられた。ニューギニアのウェワクに行かれると、今度は戦死された皆様のご遺族、戦友の方々が次々に来られると思います。それを受ける立場に、もてなす立場の側に立ってみて、何か感じられたことはございますか？

川畑：

昔と今とは随分違います。最初の頃は、寝る場所があればいい、米が食べればいい、日本語が通じればいい、という感じでした。でも最近は、今のお年寄りには、お金持ちだから。

小川：

最初の頃は、慰霊に来られるということだけで、それだけで満足ということだったけれども、最近はまだ少し、きちんと寝る所、食べる物について気を使わなければいけないという、日本人が変わってきたということですか？

川畑：

そういうことです。

会場からの質問

小川：

さて、では最後に、せっかくの機会ですのの中で、会場にお越しの皆さまからご質問があればひとつふたつお受けしようと思うのですが。

川畑：

皆さんお食事の時間が（笑）。

小川：

お食事の前にもう少しだけ。

パプアニューギニア行きのきっかけと「冒険ダン吉」

質問者 1：

川畑さん、大変有意義な、面白いお話をどうもありがとうございました。ふたつお聞か

せ下さい。最初の質問は、川畑さんが最初にパプアニューギニアにいらっしやったのは、会社のお仕事としてなのか、それとも川畑さんご自身の意思としていらっしやったのか、という点です。もしご自身の意思で行かれたとすれば、なぜパプアニューギニアに行きたいと思われたのでしょうか。それから二つ目は、川畑さんのお話を伺っていると、奥さまが現地の方でお子さまもいらっしやるということでしたが、昔の『冒険ダン吉』を思い出しました。少しそのへんのお話を伺えたらと思います。

川畑：

それは、マーガレット・ミードというアメリカの人類学者の本を読んで面白い所だと思ったからです。で、その頃、未接触民族がエイプリルの上流で出てきているといううわさが広がったので、これは面白そうだとデスクに企画書を出して、そしたら「行って来い」ということになったわけです。

小川：

2つ目のご質問ですが、川畑さんの世代だと、『冒険ダン吉』というのは、頭の中に少しよぎったりするところはあるのですか？

川畑：

『冒険ダン吉』、僕は本を全部持っています（笑）

小川：

先ほど川畑氏さんは、「ジャングルと海さえあれば、どこでも行きます」とおっしゃっていましたが、それはやはり子どもの頃に読んだものの原体験みたいなものをお持ちなのですね。

川畑：

当然そうです。

小川：

よろしいでしょうか。ありがとうございました。もうひとつ、あちらの水色のシャツの方のご質問をお受けして、最後にしたいと思います。

開発によって人々の暮らしはどう変わっているか？

質問者2：

私はかつて JICA のポート・モレスビーの事務所に駐在しまして、その当時に川畑さんにたいへんお世話になった者です。私の質問は、ウェワクに長年お住まいになっていて、ウ

ウェイクの人々の暮らしぶりは良くなっているとお感じになりますか、ということです。私たちは「開発」という言葉で、相手国の社会経済の発展のために、ある意味でインターベーション、介入を行うわけですが、長年お住まいになっている川畑さんの目から見ると、いろいろな意味で、暮らしは昔よりは良くなっているのか、あるいは、あまり変わらないのか、どうお感じになってらっしゃるのか、ぜひ伺いたいと思います。

川畑：

とても良くなっています。というのは、昔はポート・モレスビーで 100 円すると、ウェイクでは 30 円くらいだった物が、いまは同じぐらいの値段になっています。それはつまり、お金がそれだけまわっているということだと思います。それから、みんな今ではいい車に乗っていますよ。日本の中古車が向こうでは新車という感じですが、僕などはボロしか乗らないのに、皆いい車に乗っています。

小川：

経済的にはこの 20～30 年の間に、ウェイクも豊かになってきているということですか。人々の、生活に対するハッピーさ、みたいところはどのようなのでしょうか。

川畑：

ハッピーさはまだまだ変わらないね。(よくなるのは) もう少し先ですね。

ポート・モレスビーは年間所得が、だいたい 7,000 キナくらいかな。(ウェイクのとなりの州にある) バニモだと 360 キナくらい。地方は、イモ類、バナナ、砂糖などがたくさんあるから、それで食べることに何も不自由はしないわけです。ただ衣類を買う、いろいろな電気製品を買うなどにお金がかかります。そのようなことにぜいたくをしなければ、食べることは世界で一番裕福な民族です。食べることについては何も心配がない。ぜいたくなものは別にして、大自然が作ってくれたそこにあるものを食べている限り、腹一杯になるということは、食の世界から見たら世界で一番豊かです。日本人だって、腹一杯食べれば、お金が足りなくなります。

小川：

ウェイクだと町に暮らしている人でも、お金がなくても飢えたりすることはない状態が、今でも続いている？

川畑：

今でも続いています。そういうことです。

小川：

よろしいでしょうか。ありがとうございました。皆さま、長い時間ありがとうございました。川畑さんも、どうもありがとうございました。(拍手)

6月で87歳になられる川畑さんですが、まだまだ現役、そして、これからまた新しいことを始めていこうというその力には、私も、お話をしていてすごく力づけられるところがあります。本当に今日はどうもありがとうございました。(拍手)

【司会】

皆様、川畑さんにもう一度、盛大なる拍手をお願い致します。本日は第12回PIC懇談会にお越し頂き誠にありがとうございました。

(この講演録は、当日の講演内容に基づいて事務局が再構成したものです)



(ガブリエル・ドゥサバ駐日 PNG 大使)

